

## 新型コロナウイルス感染症対応にかかるクルーズ船 (ダイヤモンド・プリンセス号) 内での救護活動

活動期間:2020年2月16日(日)14:00～2月18日(火)14:00

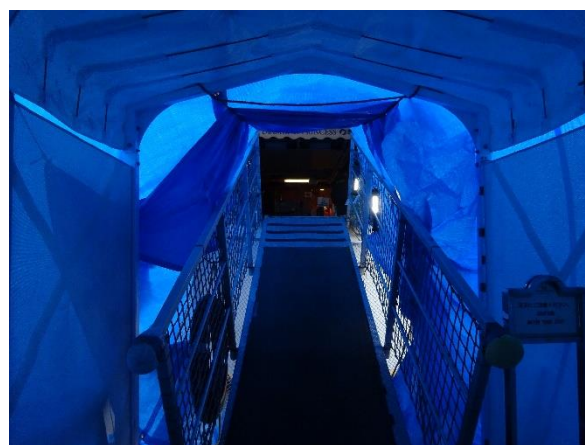
活動場所:大黒ふ頭(神奈川県横浜市鶴見区大黒ふ頭16) 停泊中のクルーズ船(ダイヤモンド・プリンセス号) 船内

背景:クルーズ船ダイヤモンド・プリンセス号内で新型の呼吸器感染症 COVID-19 の集団感染が確認されたため、同船は令和2年2月3日(月)横浜港(大黒ふ頭)に帰港後、同地に停泊を余儀なくされ、乗客乗員ともに入国できない状態となっていました。このため厚生労働省(厚労省)は、乗客乗員の COVID-19 対応を DMAT(厚労省災害医療チーム)に、それ以外の疾病や健康被害への対応を日本赤十字社(日赤)に依頼しました。日赤は、2月10日(月)から関東及び中部地区内の赤十字病院より2個班体制で派遣を行っていましたが、乗客乗員の半数以上が日本人以外であったため、国際医療救援拠点病院である大阪赤十字病院に16日から3日間の救護班派遣の要請がありました。

活動概要:医師1、看護師1、事務職員1の計4名、全員日英を含む2カ国語以上をしゃべる職員でチームを構成し、16日早朝に大阪発、昼過ぎに現地に到着しました。

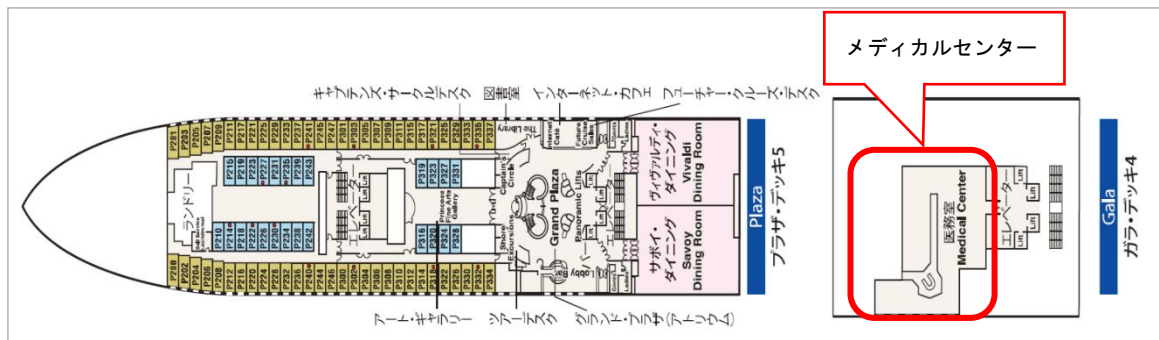


大黒ふ頭到着、クルーズ船を望む



クルーズ船へ入る通路

船内では、DMAT が後送も含めて COVID-19 対応を行い、病室訪問や、コロナウイルスの PCR 検査陽性例の搬送などを行い、日赤は船内にあるメディカルセンターで、同船の医療スタッフと協働で COVID-19 関連以外の体調不良者の診療にあたるということになっていました。



ところが実際には熱発者もメディカルセンターに来院したり、また無症状の陽性者も多く存在する中で、結局は COVID-19 感染例も診察することになりました。

静岡赤十字病院の救護班とともに 2 月 16 日 14 時から 18 日 14 時まで 24 時間のローテーションを組み、合計 21 名を診療、重症例が多く、このうち 6 名を船外へ後送しました。乗客は日本人以外の方が多く、事務要員は DMAT の通訳としてもお手伝いしました。



要員に体調不良者はなく、帰院は公共交通機関を使用せず、病院からの車両で帰宅。翌日より 14 日間の自宅待機（観察期間）とし、観察期間中は定期的に当院の感染防止委員会の医師と臨床心理士への報告を行い、14 日目に PCR 検査を実施、陰性を確認して業務に戻りました。

日赤救護班全体としては、2 月 10 日から 26 日までのべ 67 名の職員を船内に派遣しました。



課題:今回、国内救護として初めて経験することが多数ありました。まず感染症対応の救護班は、海外ではジンバブエやハイチのコレラや西アフリカのエボラなどに緊急支援を行った経験がありましたが国内救護では初めてでした。船舶という閉鎖空間での活動、国内救護なのに対象者の半数以上は外国人というのも初のことでした。とくにクルーズ船という構造や船のクルーもあちこちに入りすることから、ゾーンを完全に分けることが困難で、安全なゾーンというのがなく、すべてを感染ゾーンと考えて活動していました。クルーへの防護具のつけ方の教育をもう少しすればよかったという反省もあります。また活動終了、帰宅後も精神的なストレス(自分が感染していないか)が持続することも自然災害での救護とは異なる点でした。

今回多くの課題を認識し、勉強をさせていただきましたが、今後しばらく新型コロナがおさまることがないことから、今回の経験をもとに感染症蔓延下での災害救護について、知識と運用を整理し、物品をそろえているところです。

